

## 『新民叢報』におけるニーチェ ——明治日本との関わり——

修 斌

### 要 旨

梁启超在日本创办的《新民丛报》中有三篇文章言及尼采，其中雨尘子的一篇，梁启超的两篇。这是中文报刊最早提到尼采。这些文章中的尼采是在怎样的背景下出现的，作者对尼采的认识有什么特点，特别是《新民丛报》中的尼采与明治时期日本的关系等问题，迄今为止尚未被认真加以研究。笔者从文本分析入手，结合对当时日本文化界的考察，对以上问题进行了探讨。

キーワード……『新民叢報』 個人主義 進化論 最大多数の最大幸福 功利的啓蒙

### はじめに

ニーチェの名がはじめて中国語の出版物に現れたのは一九〇二年である。陳鼓應は『悲劇哲學家尼采』（三聯書店、一九八七年一二月）の中で、『新民叢報』第一八号に載せられた梁啓超の「進化論革命者頡德之學說」にはじめてニーチェが言及されているとしたが、実は、同年の『新民叢報』第一一号にある雨塵子の「論世界經濟競争之大勢」の方が梁啓超の文章より三ヶ月早く発表されている。梁啓超とニーチェについて、成芳は『尼采在中國』（南京出版社、一九九三年四月）の中で若干の論述を行って、梁啓超がニーチェに対してあまり関心を示していなかったようだと言及した。しかし『新民叢報』にあるニーチェに関するほかの文章には触れていない。「梁啓超と日本」という課題について、最新の研究成果としては『共同研究 梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』（狭間直樹編、みすず書房、一九九九年一月）があげられるが、梁啓超におけるニーチェ像あるいは『新民叢報』におけるニーチェ像についての言及はない。そこで本稿では、ニーチェについて触れている三つのテキストの分析を通じて、『新民叢報』におけるニーチェ、特に明治日本との関わりについて考察を試みる。

## 一、『新民叢報』と「ニーチェ」の初登場

### 1. 『新民叢報』について

『新民叢報』は戊戌変法が失敗した後の立憲派の主な宣伝拠点となった中国語の雑誌で、半月刊、横浜で印刷され、毎号一二頁にわたるものであった。一九〇二年二月八日（光緒二十八年正月初一）の創刊から一九〇七年一月二〇日にかけて五年間に九六号まで刊行された。

梁啓超が書いた創刊号の発刊宗旨はこうである。「新民」とは『大学』の「民を新たにする」の義から取ったもので、「わが国を維新しようとするれば、まずわが国民を維新すべき」（欲維新吾国，当先維新吾民）。したがって、「東洋と西洋の道徳を採択して融合し、それを徳育の方針とし、政治と学術の理論を広汎に収集し、それを知育の根本とすべきだ」（采合中西道徳以為徳育之方針，広羅政学理論以為智育之本原）。啓蒙の意図は明らかである。

『新民叢報』には、論説、学説、学術、政治、史伝、時局などの分野にまたがる二〇余りの欄が立てられ、最後までそれは基本的に踏襲された。主編の梁啓超はそれらの諸欄すべてになんらかの文章を書いており、総数は一七編余りにものぼった。

『新民叢報』は当時の中国知識界では非常に大きな影響を与えた。それが清末中国の社会思潮に与えた影響は圧倒的である。発行部数は一万三冊に達した時期もあった。毛沢東や胡適や郭沫若といった二〇世紀中国の巨人は、いずれも若い頃に『新民叢報』を読んで受けた衝撃の大きさを感慨をもって振り返っているが、梁啓超こそは、近代中国の思想界の相貌を一変させた第一の人物であった。

「新民説」を代表とする論説のほか、梁啓超らは大量な西洋哲学の学説や欧米の社会・政治理論を紹介した。ルソー、モンテスキュー、アリストテレス、ベーコン、デカルト、ベンサム、カント、ダーウィン、キッドなどの名前とその学説は、梁啓超らの紹介によって中国の知識人に広く知られるようになった。その中で、ニーチェの名も『新民叢報』に現れている。『新民叢報』において、ニーチェに言及した文章はあわせて三篇、すなわち、雨塵子の「論世界経済競争之大勢」（第一一号、一九〇二年七月）、中国之新民（梁啓超）の「進化論革命者頡徳之学説」（第一八号、一九〇二年一〇月）と「政治学学理遮言（二）・最大多数最大幸福義」（第一八号、一九〇二年一〇月）である。

### 2. 雨塵子の「論世界経済競争之大勢」について

中国語の刊行物で最初にニーチェの名に言及したのは『新民叢報』所載の雨塵子の「論世界経済競争之大勢」である。

雨塵子はニーチェのことを「尼這」とする。この文章の第三節「帝国主義之由来」には次のように書かれている。

西洋人が帝国主義を粉飾する際には、ニーチェの極端な個人主義に拠るか、ダーウィンの進化論に拠る。彼らを口実に使う。だが帝国主義は本当にそうなのか。帝国主義は本質から言えば、強盗主義である。すなわち自己の足りないことから他人の豊かさを羨望する、己の膨張するために世の中で己よりも弱い者を取り除く。そこで、いわゆる文明やいわゆる野蛮やいわゆる天職やいわゆる義務などの議論が出て、それによって帝国主義を粉飾している。(欧人之文帝国主義, 或根尼這之極端之個人主義, 或憑藉達爾文之進化論、以為口實。然帝國主義果如是乎? 帝國主義質言之則強盜主義也, 因己之不足而羨人之足。因己之膨脹而芟除世之不如己者。乃有所謂文明、所謂野蛮、所謂天職、所謂義務等以文之。)<sup>1)</sup>

作者雨塵子が帝国主義に対して批判的態度を示していることは明らかである。この文章では、彼は仏、英、独、米、露諸国の一九世紀百年間での人口増加のデータを挙げ、人口と資本との増加の状況を分析し、資本の増加はより顕著であるという事実を指摘した。その上で、「帝国主義の潮流が諸国ではやっている原因は激しい経済の競争によるのである」(帝国主義之所以行于列国也, 是經濟競争之所以劇也)と結論付けた。

当時一部の論者において一九世紀世界民族主義が盛んであることは帝国主義の思潮に由来するという主張に対して、作者は同意しない。彼からみればむしろ因果関係は逆であった。すなわち、一九世紀政治上の民族主義はまさに帝国主義(言い換えれば経済的競争)によってもたらされた民族膨張が招いてきたものであり、「すべては経済上の問題である」と反論した。

この文章には、ニーチェは「極端的個人主義」の代表者として出現しているのである。当時のヨーロッパ思想において、ダーウィンと「進化論」の代表者とされたように、ニーチェは「極端的個人主義」の代表者とされることも一般的である。作者はニーチェに関してそれ以上の文字を触れていないし、個人主義についても論じていない。しかし、作者はニーチェとその個人主義を、帝国主義とにイコールとしていないし、むしろ両者には必然的關係が存在していない、ということが考えられる。

## 二、梁啓超の文章におけるニーチェ

### 1. 梁啓超と明治日本の知の世界

ニーチェに言及している梁啓超の二篇の文章を検討する前に、まず梁啓超の日本語、日本の書物、日本の文化界という知の世界へ接近・交渉した経緯について述べておきたい。

梁啓超は一八七三年に広東省新会県で生まれた。一九二九年五七歳で北京で病没した。その生涯は四つの時期に分けられる。一八九八年以前は維新運動期であり、変法の宣伝と活動を中心とする時期である。一八九八年から一九一二年までは亡命鼓吹期であり、この時期は政治活動に従事すると同時に、精力的に『清議報』、『新民叢報』を拠点として西洋の哲学、政治、

『新民叢報』におけるニーチェ（修）

法律、社会理論の紹介を行った。一九一二年から一九二〇年までは民国従政期であり、司法総長などの大臣の職を担当した時期である。その後は文化活動期であり、教育と研究に従事した時期である。梁啓超が日本人や日本語・日本文化に接したのは主にこの亡命鼓吹期である。

梁啓超が日本に亡命してきたのは一八九八年秋である。まず東京に、ついで横浜に居をかまえた。そして一九〇六年秋帰国するまで神戸の須磨に住んだ。亡命後の梁啓超が日本の事物をきわめて精力的に摂取したことはよく知られている。彼が西洋の近代を経験した不可欠なものは日本語の書物を読むことであった。

梁啓超が日本語を学んだのは来日後のことである。来日当初は、日本人との交流は筆談によるものであった。そこで、彼は積極的に日本語を勉強し始めた。日本語の先生を担当するのは彼より一年早く来日した萬木草堂時代の同窓 - 羅孝高である。日本語を習うと同時に、梁啓超は羅孝高と一緒に有名な『和文漢読法』を刊行した。それは、日本語と中国語の文法の特徴によって、若干の通例を総括して編集した有用な日本語即席修得書である。和文漢読法によって大量の日本書を読み、ヨーロッパ風の「学理」に親しく接した梁啓超は、恰も新しい世界に入ったのである。

「三十自述」には、

戊戌の九月日本に来た。十月横浜の工商界の諸同志と『清議報』の創設について相談した。それから日本東京に一年居て、多少日本語が読めたので、思想が一変した。（戊戌九月至日本。十月与横浜商界諸同志謀設『清議報』，自此居日本東京者一年，稍能読東文，思想為之一变。）<sup>2)</sup>

と述べている。又、「夏威夷遊記」の中で、彼は次のように書いている。

また来日以来、日本の書物を広く搜して読み、まるで山陰の道を歩くように、（様々な風景に対して）いちいち目を通すことができない。それによって考え方が更新され、思想や言論は前に比べれば別人のようだ。毎日日本の新聞を読み、日本の政界と学界の出来事を理解したり忘れていたりして、あたかも自分の国にいるようである。（又自居東以来，広搜日本書而読之，若行山陰道上応接不暇，脳質為之改易，思想言論与前者若出兩人。毎日閱日本報紙，于日本政界学界之事，相習相忘，幾于如己国然。）<sup>3)</sup>

周知のように、清末以降、日本への留学生の増加に伴って、日本を經由した西洋の書籍や概念・学説の翻訳、重訳、翻案などは爆発的に増加した。西洋書 日本書 中国書というプロセスは、当時の中国知識人が西洋文明を受容する方式となった。梁啓超はまさしくその風潮の強力な鼓吹者であり最大の実行者であった。

梁啓超は「論学日本文之益」の中で、公然と日本文を通じて西洋文明を受容することが今日最大の急務であるとしている。

我が国の西洋の学問を志す者は、なぜ日本文を学ばないのか。日本は維新から三年以来、世界から知識を広く求めた。其の有益な訳書や著書は数千種類を下らない。特に経済

学、哲学、社会学などの本はもっとも多かった。それは国民の智恵を働かせ国家の基礎を強める急務である。(我国人之有志新学者、盍亦学日本文哉。日本自維新三十年来、広求智識与寰宇、其所訳所著有用之書、不下数千種、而尤詳于政治学、資生学 即理财学、日本謂之経済学、智学 日本謂之哲学、群学 日本謂之社会学 等、皆開民智強國基之急務也。) <sup>4)</sup>

来日前、梁啓超が直接日本の書籍を参照することは多かったとは言えないが、いくつかの事情からみれば、彼は日本に関する知識を若干持っていたと思われる。まず、梁啓超の先生である康有為が編集した『日本書目誌』(一五巻)が一八九七年に大同訳書局から出版され、後に、梁啓超は「読 日本書目誌 書後」という文章を書いている。その中で、梁啓超は「今日の中国は、もし自強を第一の目的とすれば、翻訳を第一義としなければならぬ」(今日中国欲為自強第一策當以訳書為第一義矣) <sup>5)</sup>と述べ、さらに、西洋を牛、日本を農夫にたとえ、我が中国はただ彼らの結果を収穫するだけでいいという比喻を通じて、日本語訳の西洋書を読む便利さを人々に訴えた。そのほか、梁啓超は黄遵憲の名作『日本国誌』に「後序」を書いたことがある。黄遵憲は外交官かつ詩人であり、彼の『日本国誌』は近代の中国に大きな影響を残した。梁啓超はこの本を通して「日本を知った」、「日本が強くなった原因が分かった」 <sup>6)</sup>。さらに、戊戌変法はまさに日本の明治維新を学んで実行された政治改革運動であるから、運動の中心人物の一人である梁啓超はもちろん日本の政治や社会などの状況を考察していないことはないであろう。

日本に来てから、梁啓超が涉獵した日本語の著書・訳書の量は膨大であった。『新民叢報』第一号に所載の「東籍月旦」だけから見ても、八種一六一冊もある。「東籍月旦」に梁啓超が紹介した本は倫理学と歴史だけである。その中で、高山樗牛、坪内逍遙などの日本のニーチェ流行との関わりの深い人物の著作も挙げられ、「美的生活論戦」の主な戦場である『太陽』誌にも言及した。梁啓超がニーチェについての本を読んだかどうか、筆者は直接の根拠を持っていないに関わらず、以上の事情及び日本の文壇で沸き起こったばかりのニーチェ流行の事実を考えれば、彼が日本、日本語の書物を通じてニーチェのことを知ったことは疑いないであろう。

## 2. 梁啓超の「進化論革命者頡頏之学説」について

同年、梁啓超は雨塵子に続いてニーチェを語った。それは『新民叢報』の「学説」欄に載せられた「進化論革命者頡頏之学説」というキッドの進化論学説を紹介する文章である。

ベンジャミン・キッド (Benjamin Kidd) (一八五八～一九一六) はイギリスの社会哲学者である。彼の社会哲学は、ロマン主義の哲学の反理性主義的傾向と進化論的生物学との融合で、人間理性は社会そのものの存在を危うくする崩壊力であると信じ、社会進歩の主要条件を集団

拘束（宗教の制裁）に求めた。その科学的・論理的貧困さが顕在するにもかかわらず、今世紀初め、宗教と進化論の和解を願望した一般民衆の間で流行した<sup>7)</sup>。

この五六字の文章の中で、梁啓超はキッドを「進化論伝播の巨匠」、「進化論の革命健児」として位置付けている。彼はまず、ダーウィンの進化論が出現してから「世界の思想界の新しい局面が開かれた」と言い、特にスペンサーがその学説を系統化し総合哲学とした後、「最近の四〇年間の世界は進化論の天下であり」、「進化論はまさに数千年の元来の学問を根底から破壊したものである」と述べている。その一方、梁啓超はスペンサーには限界があると指摘し、その限界は「人類将来の進化の経路と到達点」について明確に示していないことであると解説している。スペンサーの限界と矛盾はすでにマルクスとハクスリーそれぞれによって指摘されたにもかかわらず、相変わらず解決されていない。その問題を徹底的に解決したのはキッドであると、梁啓超は述べている。

梁啓超に紹介されたキッドの学説の主な内容は次のようである。

第一、人間であっても動物であっても競争は一般的法則である。完璧な進化に達するには「個人を犠牲にして社会を利しなくてはいけない、現在を犠牲にして将来を利してはいけない」。現在の利益を図る利己心は人性の「天然性」であり、最も「個人的」、「非社会的」、「非進化的」であり、人類全体の進歩を害するものである。

第二、人類の進歩にとって、「欲を制することは第一義である」。「天然性」を抑制できるのは宗教のみである。宗教によって社会が一体になる。宗教の責むべきことはここにある。

第三、ダーウィンの進化論の所謂「優者」、「適者」は、ただ現存の個人の利益あるいはある種族の多数の利益を指している。これはその理論の不十分なところである。自然淘汰の目的は最大多数の同類が最も適切な生存状態を得させることである。この「最大多数」は現在ではなく将来にある。したがって各部分の利益あるいは現在の全体的利益を犠牲にして将来の目的を達成することは当然である。その意味から、「死」は人々の義務であり、進化の基である。

第四、「進化の根本的意義は未来を作ること、過去と現在とは只移行期の便利な法門にすぎない。」すなわち、進化の「優、勝」や「劣、敗」に対する判断の標準は、「未来」を第一義に置くかどうかである。未来のためにたくさん貢献するものは高等生物であり、これに反するものは下等生物である。

第五、目下の政治学者、社会学者の学説にはそれぞれの相違点があるが、その共通点は現在を重視して未来を無視するのである。キッドは自分なりの進化論を持って一九世紀の思潮を次のように批判している。

一九世紀は平民主義の時代であり、現在主義の時代である。しかし、生物進化論がすでに日に日に発達するとともに、思想界は一変せざるを得ない。このような幼稚な主義の誤りは当然として隠すことができない。本質的に論ずれば、現在は実に未来の犠牲である。もしも現在だけを議論すれば全く意味がなく、価値がない。現在はただ未来の手段として

用いられれば意味や価値がある。すべての社会思想、国家思想、道徳思想はこれに帰結しなければならぬ。(十九世紀者平民主義之時代也、現在主義之時代也。雖然、生物進化論既日發達、則思想界不得不一變。此等幼稚之理想、其謬誤固以不可掩、質而論之則現在者實未來之犧牲也。若僅曰現在而已則無有一毫之意味、無有一毫之價值、惟以之供未來之用、然後現在始有意味有價值。凡一切社會思想國家思想道徳思想皆不可不歸結于是。)

これは梁啓超が紹介したキッド学説の精髓である。

キッドは、ヨーロッパ諸国の理論や学説における現在、過去と未来に関する主張を分析する際、ニーチェを挙げた。以下、そのニーチェに関する論述を分析する。

### 3. 「進化論革命者頡頏之学説」におけるニーチェ

キッドの見るところ、いわゆる社会論、国家論、人民論、民権論、政党論、階級論など様々な理論において、立論の形やその結論はそれぞれ異なっているが、着目点はみな現在にある。ついで、キッドはヨーロッパの主要国であるフランス、イギリス、ドイツの理論界で大きな影響があるルソー、アダム・スミス、ベンサム、スペンサーなどの名前をあげ、その学説の要点を押さえて分析した。ドイツについて言及する際、次のように述べている。

今日のドイツでは、最も勢力がある二大思想は、マルクスの社会主義とニーチェの個人主義である。ニーチェは極端な強権論者であり、一昨年に狂疾で死んだ。その氣勢はヨーロッパ全体に広がって、十九世紀末葉の新しい宗教と呼ばれる。マルクスは、今日の社会の弊害は多数の弱者が少数の強者に制圧されているところにあると言う。ニーチェは今日の社会の弊害は少数の優者が多数の劣者に束縛されているところにあると言う。二人の主張はみな根拠を持っていて、論理が通っている。要するにその目的はみな現在にあるが、いわゆる未来を全然無視している。(今之德国、有最占勢力之二大思想。一曰麦喀士之社会主義、二曰尼志埃個人主義。尼志埃為極端之強権論者、前年以狂疾死。其勢力披靡全歐、世稱為十九世紀末新宗教。麦喀士謂今日社会之弊、在多数之弱者為少数之強者所压伏。尼志埃謂今日社会之弊、在少数之優者為多数之劣者所鉗制。二者雖皆持之有故、言之成理、要之其目的皆在現在、而未嘗有所謂未來者存也。)

ここでは、ニーチェの個人主義はマルクスの社会主義と共に、ドイツにおける「最も勢力がある二大思想」とされていた。マルクスの「強者」、「弱者」に関する議論も、ニーチェの「優者」、「劣者」に関する議論も、キッドは詳しく評論されていないし、それぞれの「根拠」と「論理」は何かについても言明されていない。しかし、キッドによれば、両者の共通点は「現在を重視する」ことであり、これは自分の「未来を重視する」学説と根本的な区別が存在している。

以上の引用の 中の部分は梁啓超のニーチェについての説明である。「十九世紀の新

『新民叢報』におけるニーチェ（修）

しい宗教」という言い方は当時の日本におけるニーチェ紹介者（例えば姉崎嘲風）の文章の中にはしばしば見られる。ニーチェを「極端な強権論者」と呼んだのは大体ニーチェ批判側の論調である。以上の言説によって梁啓超におけるニーチェ像は一体何なのかが断定しにくい。しかし、梁啓超に引用されたキッドの「今日の社会の弊害」と「少数」、「多数」との関係についての内容は、まさに梁啓超がもっとも関心を深く持っている「立憲政治」と「大衆政治」に関する問題であった。ニーチェの大衆政治に対する批判は高山樗牛と魯迅の共感と呼んだが、梁啓超の場合には冷淡であることよりむしろ排斥の態度を示した。その点については後ほど改めて触れたい。

#### 4. 「進化論革命者頡頏之学説」の文献依拠について

梁啓超の日本亡命は、彼が日本人の著作及び日本語訳の西洋思想と本格的に出会う機会を提供した。彼の一連の西洋学説の紹介は多くは日本人の著訳書を参照したことが分かる。しかし「進化論革命者頡頏之学説」は具体的になにを手本にあるいは依拠にしたのか、今までまだ確認されていない。

この文章では、二冊のキッドの著書が梁啓超に挙げられた。一つは『西洋文明の原則』（梁は『泰西文明原理』と書く）である。英文原著は『Principles of Western civilisation』であり、一九〇二年に出版されたものである。もう一つは『社会の進化』（梁は『人群進化論』と書く）である。英文原著は『Social evolution』であり、一八九四年に出版されたものである。この二冊の著書はともにキッドの主著であり、当時の日本に知られていた。その中、『社会之進化』の日本語版は一八九九年に東京の開拓社によって出版され、初版後の二年間で、第四版まで発行された。これは有賀長雄著『社会進化論』（東洋館書店、一八八三年）に続いて明治時代における最も影響のあった進化論についての著書であった。訳者の角田柳作は東京専門学校を卒業後、教育活動をしながら仏教や日本文化といった幅広い領域で研究に従事し、アメリカにおける「日本学の父」と評される人物である。

『社会之進化』は全部で二五二頁であり、作者の「原序」と訳者の「緒言」のほか、あわせて十章によって構成されている。これを「進化論革命者頡頏之学説」と対照して見ると、梁啓超のキッド進化論についての紹介は概ね著書の中で論じられている。特に第一章「概論」及び「原序」との間、具体的な対応関係がある言説も見える。しかし肝心のニーチェに関する論述が見つけれられない。原著のマルクス、エンゲルスの社会主義理論に対する紹介・分析、及び宗教と理性の衝突によってもたらされた社会の進化に関する議論など、紙数を大きく占めている内容は梁啓超は触れていない。従って、梁啓超はこの本以外の、ほかのテキストあるいは書評類の文章に依拠していた可能性が高いと思われる。



## 5. 梁啓超の「最大多数最大幸福義」について

この文章は「政治学学理遮言(二)」として第一八号「政治」欄に掲載された。その(一)は「君主無責任義」であり、第一五号に掲載された。

この文章で、梁啓超は「最大多数の最大幸福」を「欧米社会において最も流行の政治学説」と呼んで紹介している。いわゆる「最大多数の最大幸福」とは、功利主義の学説の一つの原理としていつもベンサムの名とともに想起される。この原理は当時欧米社会で用いられた制度や慣習や信念の有効性(功利性)を、客観的な評価基準に照らして検査するため使われたのである。ベンサムの著作は明治十年代から陸奥宗光らによって日本語に翻訳されている。「最大多数の最大幸福」という言葉は広く人々に知られただけではなく、長い間日本の議会政治の重要な原則とされていた。

「最大多数最大幸福義」を発表する一ヶ月前、梁啓超は『新民叢報』第一五、一六号に「楽利主義泰斗邊沁之學説」(「功利主義の泰斗ベンサムの学説」)と題してベンサムの倫理説と政治法律論を紹介した。その中では「ベンサムは常に言う。人道の最善の動機は自利にある。また常に言うのは最大多数の最大幸福である」(邊沁常言, 人道最善之動機在於自利, 又常言最大多数之最大幸福)と、はじめて「最大多数の最大幸福」の原理を言及した。また、「進化論革命者頡頏之学説」の中では、キッドの口を借りて「近世平民主義の新思想である最大多数の最大幸福は、ただ現在の人類の多数を基準とするにすぎない」(近世平民主義之新思想所謂最大多数之最大幸福者, 亦不過以現在人類之大多数為標準而已)と述べた。

梁啓超がこの評論で表明した主旨は、今日の欧米文明は移行期の文明であり、それに対して中国の文明はまだ移行期に達していない段階である、ということである。彼は「最大多数の最大幸福」の原理を通じて自分のこの観点を説明している。この文章の中に書かれているニーチェは梁啓超の主張と対立するものとなった。

梁啓超は論を次のように展開している。

第一、国民における幸福の「多」か「少」かは、社会の文明のレベルを判断する基準である。数千年の歴史をさかのぼって見れば、幸福の範囲は徐々に広がっていることは事実である。

第二、幸福が日に日に拡大された原因は、自然進化の一般の法則によるものであり、人間の「学理」によるものでもある。両者は欠かすことができない。

第三、欧米における政治の安定は各階級、各集団が互いに争ったり、譲ったりした結果である。宗教家は譲りを主張するに対して、哲学者は争いを説得する。その両者が相互にバランスを取るにより、社会の政治体制は安定し、進歩してくる。

第四、中国の儒家思想はすべて「謙譲」を主張する。これは理想として良いが、しかし現実では往々にして「譲りはあるが争いは無ければ、その結果かならず弱者は更に弱くなり、強者は更に強くなる、世は最後まで公平が実現できない」(有讓而無争則弱者必愈弱強者也愈強,

而世終不可得平）。

第五、梁啓超は中国と欧米との比較を行った。欧米社会では、社会進化論の競争という原理の下、一人一人が「存」「勝」を求める。多数の弱者がもし上手く争えば、たとえ強者であっても譲らざるを得ない。中国社会では、伝統的倫理が謙譲だけを勧めた結果、弱者は譲るが、強者は譲れない、権力と幸福は譲らない者に全て奪われるに違いない。これは中国では豪強民賊に幸福を独占させる原因である。

第六、幸福は権力から生み出される。権力は知恵から生み出される。幸福は必ず自ら追求しなければならない。知恵は幸福と正比率となし、もし最大多数の人に知恵があれば、この最大多数の人は幸福が得られる。

文章の最後に、梁啓超は「最大多数の最大幸福」という原理を政治制度と繋げて述べる際、「議会政治の批判者」としてニーチェをあげた。

## 6. 「最大多数最大幸福義」におけるニーチェ

梁啓超によれば、「最大多数の最大幸福」と言う原則は実行する条件或いは前提が必要である、「もしも、幸福はその国民が自ら努力して獲得したのでなく、外部から強制的にあげたとすれば、結局両側から其の弊害を受けないものはない」（苟使其民不能自有焉而欲強而予之，未有不兩受其弊者也）。ここから、彼は次のように述べている。

したがって、ドイツ人のニーチェ氏は、最近の著作で、多数の愚者が少数の智者を制圧するのは今日の大衆政治の弊害だと力をこめて主張している。また、ロシアの宗教総監のポベドノースチェフ氏<sup>8)</sup>も著作の中で、政党と議会政治の悪弊を強く攻撃している。彼らの言論はみな学界を大きく動かした。本来、多数者の幸福は少数者のそれより優先ということは絶対に正しく反論できない道理である。しかしこのような異論はなぜ認められ、人々を動かしたのか。だから、智恵の程度が大多数に到達していないまま、幸福への欲望の程度がすでに大多数に広げてきたとすれば、色々な弊害が続出しないものはない。しかも反対の徒に口実を残してしまった。（故徳人奈志埃氏近著，力言多数之愚者压制少数之智者，為今日群治之病。而俄國宗教總監坡 薩 那士德夫氏亦著論，極攻政黨及議院政治之弊。而其言皆大動學界。夫多數幸福之優于少數天經地義無可辯駁者也，而此等異論何以能容喙焉何以能動人焉，則以智慧程度未達于大多數而欲幸福之程度進于大多數，未有不百弊叢生，而貽反對之徒以口實者也。）

「進化論革命者頡德之学説」と同じように、この文章でも、梁啓超はニーチェを「奈志埃」と訳し、ニーチェについての言説も似ている。前文での「優者」、「劣者」は後文での「智者」、「愚者」になった。

梁啓超は議論をもっと大衆政治にめぐらせた。彼によれば、多数の幸福は少数のより優先す

ることは当然のことであり、討論の余地もないが、しかしながら大衆の知恵の水準がまだ低いので、ニーチェやポペドノースチーフなどの大衆政治の攻撃者に「口実」を与えてしまった。ニーチェらの「異論」も人々に受け入れられ、ヨーロッパの学界を大きく動かした。ここでは、梁啓超の大衆政治に賛成することは窺える。清末の「立憲派」の首領として、梁啓超は西洋の政治理論を紹介する時、議会政治を主張する立場を取ったのは当然なことであろう。

それにしても、議会政治は梁啓超にとって、理想的で完璧なものではない。この文章の中で、彼はフランス学者ポーリュウ（波流）が書いた議政体批判の『今世国家論』<sup>9)</sup>を挙げて次のように述べている。

その論旨はドイツのニーチェ、ロシアのポペドノースチーフと違う。ポーリュウの意見は、代議政治は多数の独裁である、少数者が多数者に対する独裁はいけない一方、多数者が少数者に対する独裁もいけない、少数の幸福のために多数の幸福を犠牲することはいけない一方、多数の幸福のために少数の幸福を犠牲することもいけない、のである。（其論旨與徳之奈志埃氏俄之坡氏異。波流之意以為、代議政治者、多数之専制也。少数者専制多数者固不可、多数者専制少数者亦不可。為少数之幸福而犠牲多数之幸福固不可、為多数之幸福而犠牲少数之幸福亦不可也。）

理想として、これはもっとも良いことであるが、今の世界の文明の程度はまだこのような段階ではないと梁啓超が指摘した。そのため、「利害得失を比較して損の少ない方をとるべき」（両害相権則取其輕）と、これが梁啓超の態度であり、彼の「最大多数の最大幸福」という原則を肯定する理由である。

### 三、梁啓超の「功利的啓蒙」と彼のニーチェ認識

言うまでもなく梁啓超の主な業績は「啓蒙」である。彼の手によって大量な西洋の哲学・政治の学説が中国へ輸入された。この面では近代中国の第一人者と言えるであろう。しかし、よく言われるようにそれは「梁啓超式の輸入」（梁啓超式的輸入）であり、その浅薄性は明らかである。彼自身もこのように述べたことがある。

清末の思想界の粗雑皮相は、啓超の所為と関係がある。……啓超は広くて浅いことを求めた。ある学問に対していささか接触しても、すぐ評論を展開した。故にその著述は曖昧模糊として、好加減で大雑把な話がおおく、甚だしい場合には、全く誤りである。（晚清思想界之粗率浅薄、啓超輿有罪焉。……啓超務広而荒、每一学稍涉其樊、便加論列。故其所著、多模糊影響籠統之談、甚者純然錯誤。）<sup>10)</sup>

そのような「浅薄性」にはさまざまの原因がある。原因の一つとしては日本経由という点があげられる。西洋の思想はこのような二重の翻訳、二重の理解を通じて梁啓超なりの特徴を賦

与された。他に、最も重要な原因は中国社会の要請である。

以上の梁啓超の二篇の文章を通じてみると、梁啓超には功利性への言及ばかりでなく、矛盾した議論も見られる。例えば、キッド流の未来重視の進化論は梁啓超に称賛された。この種の進化論に超越された様々な社会・政治理論の中で、ベンサムの「最大多数の最大幸福」が含まれて、その限界が指摘されている。他方、彼は「最大多数という言葉は私は信じて疑わない」（最大多数一語、吾信其無以易也）と言う。「最大多数の最大幸福」は一種の学理として彼によって積極的に紹介されただけでなく、立憲派の政体樹立の思想的綱領となった。彼はこの学理の不備な部分を認める同時に、政治の現実的需要から着目してこれを選択した。梁啓超にとっては、重要なことはある学説の細かさや真実ではなく、当時の中国の政治・思想・社会にとって必要かどうかということである。

この「功利的啓蒙」は梁啓超に力の重心を「政治」とそれに関連する分野に置かせた。後の魯迅の「人間の確立」（立人）、「精神の戦士」という「精神的啓蒙」と鮮やかな対照をなしている。そうは言っても、両者には共通点がある。一つはその立脚点の一致である。つまり中国の富強と文明である。梁啓超は西洋の学説を紹介、批評するとき、度々欧米を中国と比較して論じ、欧米の事情（経験あるいは教訓）をよく考えてから自分の対応策を取るように、国民に注意を与えた。もう一つは、「破壊」「闘争」の哲学であると言える。「破壊主義」は明治日本の思想界の流行語の一つであった。青年魯迅は「破壊」「闘争」を激しく提唱する際、明確にニーチェ、イブセンを手本とした。梁啓超には魯迅ほどはげしい言論は見られないが、自分が思想界では大きな破壊力を持った、ということは彼に認められた。彼は、伝統的な倫理を捨てて、進化・競争の精神を以て個人と国家の幸福を求める（幸福者必自求之而自得）と、国民に呼びかけている。

ところで、『新民叢報』には梁啓超のニーチェに関する論述は多くない。しかしその内容と結びつけてみれば、彼のニーチェ認識には次の三つの特徴があると指摘できるであろう。

まず、当時のヨーロッパ世界では、ニーチェの影響が非常に大きかった、思想界・学界に十九世紀の新しい宗教と呼ばれる。次に、ニーチェは個人主義の代表者であり、特に強権論者である。第三、ニーチェは「議院政治」「大衆政治」の反対者であり、「現在」を重視し、少数の「強者」「智者」を重視する、しかし、ニーチェのこの説に対しては、梁啓超は排斥すべきだと主張している。

二篇の文章におけるニーチェは、みな梁啓超の主張の対立面として現れている。恐らく、ニーチェの「異論」は梁啓超の思想・主張と対立する、または一致しないため、ニーチェは梁啓超にそれ以上注目されなかった。にもかかわらず、ニーチェ流の「智者」「愚者」についての言論に刺激されたからこそ、梁啓超は大衆の素質の重要性を認識するようになった。そういう意味では、ニーチェの説は彼の啓蒙活動に客観的に効果を与えたと言える。なお、梁啓超のニーチェ認識は雨塵子との間には微妙な差が存在している。それはニーチェの個人主義の理

解という点にある。雨塵子には、ニーチェの極端な個人主義は帝国主義と距離を保たれているが、梁啓超は、ニーチェを「強権論者」と呼び、いわゆる「横暴のニーチェ」という解釈<sup>11)</sup>を強調している。

## おわりに

「極端的個人主義」、「十九世紀末之新宗教」、「最大多数之最大幸福」、及び社会主義、帝国主義、進化論など明治期に創出された大量の日本語は、そのまま梁啓超らによって使用され、重要な概念として中国に輸入された。西洋の思想・学説はこれらの概念とともに中国の近代知識人に摂取された。そのうちに、ニーチェも含まれた。梁啓超におけるニーチェ認識の三つの特徴は、すべて日本におけるニーチェ受容に際して指摘されたものである。全体的に言うと、中国の最初のニーチェは「良いイメージ」ではなかった、とりわけ梁啓超らの立憲派にとってはそうであった。

梁啓超と『新民叢報』の日本の文化界との交渉は、中国の最初のニーチェ受容の前提となっている。『新民叢報』の紹介によって、はじめてニーチェとその個人主義は中国へ輸入された。これらのわずかな紹介は当時の欧米、日本でのニーチェ像にとうてい及ばなかったが、なんと言ってもニーチェという名が中国の知識人に知られはじめた。我々は『新民叢報』を通じて、ニーチェの「個人主義」のイメージのあらましを見ることができるが、その中身や内包するものが何であるかはまだはっきり分らない。ニーチェの「大衆政治」や「多数」に対する攻撃を見ることができるが、彼の十九世紀のヨーロッパ文明に対する批判者の「文明批評家」としての全体像は見えない。ニーチェの「強者」鼓吹の傾向を見ることができるが、彼の既成の伝統、体制、文明と徹底的に対決する「超人」精神は見えない。そういう意味では、日本の学界から受容した『新民叢報』のニーチェはかなり表層的であると言えよう。そのような状況は梁啓超の「功利的啓蒙」の結果であった。しかし、それはその当該する時代において西洋思想を輸入する際の普遍的現象であったと思われる。

『新民叢報』において紹介されたニーチェ像と、二年後の王国維によるニーチェそして五年後の魯迅によるニーチェ像と比較してみれば、のちのニーチェの受容の方が格段に深化していたことは明瞭である<sup>12)</sup>。

## <注>

- 1) 本稿のテキストとする『新民叢報』は台北・芸文印書館の影印本(一九六六年)。
- 2) 『飲冰室合集・文集之十一』(中華書局出版、一九八九年)一八頁。
- 3) 『飲冰室合集・專集之二十二』一八六頁。
- 4) 『飲冰室合集・文集之四』八〇頁。
- 5) 『飲冰室合集・文集之二』五二頁。

『新民叢報』におけるニーチェ（修）

- 6) 『飲冰室合集・文集之二』五〇頁。
- 7) 『世界名著大事典』（平凡社、一九六二年）第八巻を参照。
- 8) ポベドノステフ（Pobedonostsev, Konstantin Petrovich）（一八二七～一九〇九）はロシアの政治家、法学家。一八八〇年、ロリス・メリコフの治下で、アレクサンドル二世の教師となり、また聖宗務院長となり、一九〇五年までその職にあった。
- 9) ポール・ルロワ・ポーリュウ（Paul, Leroy-Beaulieu）の著作『今世国家論』は「日新叢書」の一種として一八九四年に東京の八尾書店によって出版された。
- 10) 「清代學術概論」。『飲冰室合集・專集之三十四』六五頁。
- 11) Crane Brinton の分類によると、第二次大戦終戦前のニーチェの追随者や解釈者を「温和のニーチェ像」と「横暴のニーチェ像」（gentle and tough）の二種類に分けられる。「温和のニーチェ像」とは大体社会や文明を批判する人々を指す、「横暴のニーチェ像」とは一般に強権や暴力を称賛する者を指す。張釗胎「早期魯迅的尼采考 - 兼論魯迅有没有讀過勃蘭兌斯的 尼采導論」（『学人』第九輯、江蘇文藝出版社、一九九六年四月）。
- 12) 拙稿「日本留学期の魯迅における個人主義」（『現代社会文化研究』第一五号）同「日本留学期の魯迅におけるニーチェ」（『東アジア - 歴史と文化』第九号）を参照。